

乳がん発見 機会遅れ

コロナで 変わる世界

第1部 暮らしの風景



スーザン・ダニエルズさん
—本人提供

英西部ウエールズに住むスーザン・ダニエルズさん(60)は5月初め、シャワーを浴びている時に、左胸にある小さなしこりに気がついた。英国では50歳以上の女性は3年に1度、乳がん検診を受けられる。しかし、ダニエルズさんは3月に予定していた検診が受けられなかった。新型コロナウイルスの感染拡大で医療機関の状況が逼迫。ロックダウン(都市封鎖)で外出制限も行われ、公的な検診が中

英 検診中断、98万人影響

断されたためだ。「コロナというこれまでに経験したことのない状況に医療関係者も苦勞しているに違いない」。そう自分に言い聞かせ、検診が受けられなかったことは受け入れた。だが、毎日、胸を触るたびに不安は募った。6月にかかりつけ医を訪ねると、検査で乳がんが診断された。がんは、しこりのある左胸だけでなく右胸にも見つかった。

通院が始まると新型コロナウイルスの感染防止のため、家族と離れて暮らすことになった。「家族や友人を安心させるため電話では『全てうまくいくよ』と伝えていたが、本当は泣きたかった」と打ち明ける。ダニエルズさんは夏に手術を受け、10月から放射線治療を続けている。コロナ禍でも早期に治療を受けられたことは「運が良かった」と言っが、「治療を待っている時間はとても長く感じた。他にも

自分のような女性たちがいるかもしれない、気がかりだ」。

英国最大の乳がん慈善団体「ブレスト・キャンサー・ナウ」の推計によると、英国内で乳がん検診が一時停止したことで98万6000人の女性が検診を受けられなかった。過去の統計からこのうち86000人程度が乳がんに罹患している可能性があるといい、その早期発見の機会が失われた恐れがあるという。英国では、秋以降に感染が再拡大し一部地域では今も検診が停止している。同団体のデルス

・モーガン代表は「検診が再開された地域でも、社会的距離を確保する必要から人数が制限され、検査に時間がかかる」と説明。専門医への紹介が難しくなり、治療が停止したりすることも心配する。

埋もれる乳がん

欧米隠れた「第3波」

コロナで変わる世界

1面からつづく

第1部 暮らしの風景

感染の「第2波」に襲われている欧米では、コロナ禍の余波でがん死が増える「隠れた「第3波」」に懸念が広がる。

ロンドン大などの研究チームは、英医学誌ランセット・オンコロジーで7月に発表した論文で、英国ではコロナ禍に伴う検診の中断や診断の遅れで、乳がんの診断された年後までに死亡する人の数が最大9・6倍増えること推定した。大腸がん、肺がん、食道がんなど主要ながんでも、本来なら命を落とさずに済む死者が相対数増加する可能性がある。

研究チームは「パンデミック（世界的大流行）ががん患者に与える影響を緩和するため、緊急の対策が必要」と警鐘を鳴らす。

国内の検診大幅減

日本も対岸の火事ではない。政府は緊急事態宣言を発令した今年4～5月、感染が拡大する地域では原則として集団検診事業を延期するよう通知し、大半の自治体で検診が止まった。

全国の7割の自治体から住民検診を委託している「日本対がん協会」の8月の調査では、回答があった全国20府県で乳がん検診を受けた人は、4月は前年同月の14%、5月は17%まで落ち込んだ。緊急事態宣言が解除された後、検診は再開されたが6月は40%、7月も62%にとどまった。感染者数が全国最多の東

京都は深刻だ。都府庁医学協会が実施した乳がん検診は4～5月はほぼゼロになった。8月だけは前年を上回る件数を実施したが、今年4～9月の受診者は前年同期の7割にとどまる。

対がん協会の各地の支部へのアンケートでは、「2020年度は受診者が昨年

自治体は安全周知を

「安心してほしいね。」

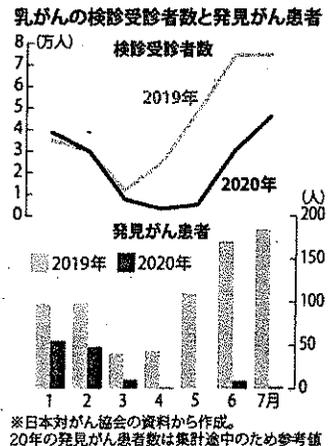
栃木市の集団がん検診の会場で10月、受診者の女性(左)の姿勢を調整しながら、マンモグラフィ検査

を担当するマスタの技師が声をかけた。女性は今年に一度の乳がん検診を欠かさず受診してきた。しかし今回「検診会場は人が密集しがちでコロナに感染するかも」受診をためらった。万「感染した場合、自分だけだけでなく、パートナーや家族に感染を広げる」とへの不安を指摘する。

自治体は検診会場での感染防止策のガイドライン策定にかかわった田中眞紀子・久米米松病院院長は、受診者の不安を取り除くため「医療者側が十分な感染防止体制を整備して『検診は安全』と繰り返し説明し、受診者に理解してもらってほしい」と訴える。田中医師は受けなかった人に早期の受診を勧めるほか、「定期的に自分も乳房を触ったり、しりとりがないかのチェックをしたりして、異常があればすぐに病院に行くことが大切」と強調する。



コロナ禍で受診控えが広がる中、感染防止を徹底し多くの受診者を受け入れる栃木保健福祉センター＝栃木市で10月、玉城遼郎撮影



糖尿病も要注意

コロナ禍での受診控えは持病のある患者でも広まっている。

水戸市にある「みなみ赤塚クリニック」の高橋秀夫医師は最近、糖尿病の合併症による眼底出血があった女性患者のため、他院への紹介状を書こうとした。手術が必要なためたが、患者は「別にいいです」と断ったという。別の男性患者には体重の減少など、がんが疑われる症状があったため検査を勧めた。しかし男性は「もう少し様子を見たい」と断った。後月、大きな体調が悪化したため大きな病院を訪れ、がんが見つかったという。高橋医師は「院内の滞在時間を短くしようと、検査を受けたがらない人が目立つ。コロナ前の3、4倍に増えたのでは」と明かす。

糖尿病患者は、腎臓や心臓の合併症が進行するたが、自覚症状が少ないため治療を中断する患者は多く「サイレントキラー」(静かなる殺し屋)と呼ばれてきた。また、新型コロナウイルスが心臓に侵襲も認め

合わぬ時間帯を選んでいく。そうすると、足指に病院を後にした。

民間企業の健康保険組合などをつくる健康保険組合連合会が全国4603人を対象に今秋実施した調査で、持病がある人の4人に1人がコロナ禍で医療機関の受診を控えたり、頻度を減らしたりしていたことがわかった。このうち約8割は受診控えの結果「体調が悪くなったと感じる」と答えた。一方「コロナ以前と比べて生活習慣病の予防に関心を抱くようになった」との回答を全体の38%が挙げた。

糖尿病患者にとって、自

も懸念材料だ。都心への通勤者が多い茨城県土浦市の糖尿病クリニックでは、在宅勤務が続き、血糖値が上がりが体重も増えた患者が多い。冬は一般的に、宴会続きによる食生活の乱れや寒さから、血糖値や血圧が高くなる。糖尿病専門医は「この冬、多くの患者が脳梗塞や心筋梗塞を発症するのは危惧する。」

オンライン診療に限界

国は「コロナ感染拡大を受けて、これまで一部でしか認められていなかったオンライン診療を原則解禁した。も

【熊谷 八田浩輔】